都心回帰　過密化する小学校

写真は朝日新聞 5 月 29 日夕刊「SCENE」。生徒数が 1100 人を超える堀江小学校。講堂での全校集会では、壁際までぎっしりと整列する＝大阪市西区。

子育て層の都心回帰が進む大阪市中心部の小学校で、児童が増えすぎる「過密化」が深刻になっている。特にタワーマンションが次々と建設されている北区、中央区、西区の小学校では 4 年後に約 130 教室が不足するという試算もある。

大阪市中心部では、高度経済成長期にドーナツ化現象などにより児童数が減少。小学校の統廃合や定員の見直しなどが進んだ。しかし近年、住宅ローンの低金利などの後押しを受け、都心部でタワーマンションの建設が増加。コンパクトな生活圏を望む、若い共働き世代の入居が相次いだ。商業地で元々校地が狭い都心部の小学校に、児童が押し寄せる形となっている。

すでに過密状態となりつつある小学校では、休み時間を学年別に分けたり、近隣の公園を運動場代わりにしたりして急場をしのぐ。特別支援学級を含め 39 学級を抱える堀江小（西区）の中山大嘉俊校長は「毎年約 80 人ずつ児童が増え、何をするにも時間、場所、物が足りない」。

市は部門横断のプロジェクトチームを立ち上げ、今春、校舎の新増設や校区見直しなどを盛り込む対策案を公表。だが、「児童数の推計は都市開発や経済状況に左右され、対応は簡単ではない」と担当者は話す。

写真下は 4 月 7 日の朝、大阪市立中央図書館に行く前に撮った。堀江小学校の前で、入学式を待つ新入生と保護者たち。毎年約 80 人ずつ児童が増えている、という校長の言葉を実感できる。堀江小の近くには数多くのマンションが立ち並び、建設中のタワーマンションも目につく。

西区界わいを歩いていると、子ども連れの若い世帯を多く見かける。子育て層を中心に「都心回帰」が進んでいるようだ。バブルの頃は都心部からの人口流出、空洞化か問題になっていた。それが一転して、局地的な人口急増、とりわけ子育て層の増加、過密化する保育園や小学校に様変わり。人口減少時代のタワマン傾斜の都市開発、「都心回帰」現象に注目したい。

（2018 年 6 月 3 日）